

# 身延期における日蓮聖人の如説修行

上 田 本 昌

## 一、

晩年の九年間を身延山ですごした日蓮聖人（一二三二―二八）は、周知の如く文永十一年（一二七四）五月十二日に鎌倉を發つて、同月十七日に甲斐国波木井郷の身延山に到着された。時に聖人は五十三歳であり、数人の弟子と信者を伴つての入山であつたが、当時は飢饉のため山中での生活は難渋を極めたので、一人のみ残つて孤独な清貧に甘んずる日常となつたのである。

鎌倉に在住しておれば、数多くの弟子や信徒らに囲まれ、衣・食・住にもこと欠くことなく、不足のない生活ができたことであろうのに、敢て交通不便な山間の僻地を選んで、身延へ入山されるに至つた理由は一様ではなかつた。最もよく知られているのは、

「又賢人の習<sup>ヒ</sup>、三度国をいさむるに用<sup>ヒ</sup>ずば、山林にまじわれといふことは、定<sup>ル</sup>る例なり<sup>シ</sup>」

とあるごとく、三諫の後に賢人の例に習つて山林に交わることになつたというのであるが、この事の他にもいくつかの理由があつたのである。この点についてはすでに研究がなされているので、詳細は略すことにするが、世間では聖人の入山を逃避行とみる向きもあつた。そこで聖人は入山二年後に、

身延期における日蓮聖人の如説修行（上田）

「賢人のならひ、心には通世とはをもはねども、人は通世とこそをもうらん」<sup>3</sup>

と述べて身延入山を遁世でないことを明らかにしている。

聖人の入山をめぐって学者の間でも諸説が分れているが、それは聖人遺文の中に、諸説の根拠となりうる記述が見られるためでもある。聖人の心中にはいくつかの理由があつて入山を決意されたものと考えられるのであり、重層性を持った心的要因があつたことを窺うことができる。入山七年目に一代を振りかえりつつ、

「今山林に世を遁れ、道を進んと思しに、人々の語様々なりしかども、旁存する旨ありしに依て、当国当山に入て已に七年の春秋を送る」<sup>4</sup>

とも述べている通りである。「旁存する旨」の中には複数の理由があり、世人の批評には様々な言葉が流れていたことがわかる。

また「世を遁れ」という語からは、一見遁世を思わせるようであるが、単なる遁世や隠棲でないことは、そのすぐ後に「道を進まんと思ひしに」と続く言葉があることでも理解できよう。即ち、「道を進まん」とは言うまでもなく、「仏道」への精進であり、更に深く奥へ仏道を進んで行くことを意味するものといえよう。生ある限り仏道を精進することが聖人にとつての願行であつたのである。

二、

元来、仏教の目的は仏に成ることであり、そのための教えが八万四千の法門となつて説示され、解説され論釈されていったのである。従つて目的達成のために衆生はその教えに依つて日常生活を律し、教法の定めるところに立脚し

て行動をとることが、最も仏道を成就する上で重要な要件とされてきている。

即ち、仏教徒はいかに生きて行くべきか、また「どのような生活をして行くことが正しいのか、」を常に考慮しつつ仏説に従って、日常の諸作をなすべきことが定められているのである。初期の仏教經典に説かれた各種の戒律も、大乘の各經典に示された戒律も、みな生活態度と仏道を歩む上での掟を教えたものであった。一例をあげるならば『DHAMMAPADA』の中に、

「きまりにしたがつて、公正なしかたで他人を導く人は、正義を守る人であり、道を実践する人であり、聡明な人であるといわれる。」

とみえるごとくである。仏の説に従って公正に法を説き、人を導く者は正義を守る人であって、そのことはそのまま仏道を実践することであるというのである。即ち「仏道を実践する人」とは、「正義を守り」かつ「公正に教化する人」のことであると解することができる。それは独断で行うのではなく仏の説く「きまり」に従ってという基本の上に立つての実践ということになる。つまり「説の如くに」に実行することであり、「如説修行」を意味することになる。これは仏道を修する者の基本であって、勝手気ままに振るまうことは公正ではなく、正義を守ることもできない。

そこで、日蓮聖人は何によりも公正・正義を第一に考え、如説修行の道を選ばれるに至ったのである。仏説に従って行動することが正義であり、公正な教化に連なるものと理解したのである。従って聖人は

「涅槃經と申經に云、依法不依人等云云、依法と申は一切經、不依人と申は仏を除き奉て外の普賢菩薩・文殊師利菩薩（乃至）諸人師なり。此經に又云、依了義經、不依不了義經等云云。此經に指ところ了義經と申は法華

身延期における日蓮聖人の如説修行（上田）

經、不了義經と申は（乃至）已今当の一切經なり。」

とみえるごとく、先ずもつて教主たる仏に依るべきであり、人師論師の説によるべきでないことをあげ、更に仏法について丁義經である法華經によるべきことを強調されているのである。即ち聖人の信行生活における基本は、教主釈尊を依所とし、その説かれた法門については、丁義經たる法華經によるべきことを明確にされたのである。

法華經のきまりに従つて、公正なしかたで他人を導いたのであり、正義を守り通したのが聖人の日常であつたといえる。聖人の出られた時代は、「世皆背<sup>レ</sup>正<sup>ニ</sup>、人悉<sup>ハ</sup>帰<sup>ス</sup>惡<sup>ニ</sup>」という状態で、仏よりも人師の説を尊重する傾向にあつた。仏説の基本に戻つて「依法不依人」の「きまり」に従い、「丁義經」たる法華經を所依として、「如説修行」の道を進むべく立教を志し、最後には身延への道を選ばれるに至つたものと考えられる。

### 三、

身延山での生活は、「於如来滅後、応一心・受持・読誦・解説・書写・如説修行」の經文が示すところに従つて、まさに如説修行の日常生活であつた。鎌倉での辻説法によつて象徴される布教活動は、専ら「如来使」としての教化が主眼であつたが、身延期ではその他に更に個人的如説修行により、懺悔滅罪を成就し、仏道を一層奥へ進むことを念願されていたと考えることができる。

先ず最初は「読誦」についてであるが、これは明らかなごとく經典を讀誦することである。聖人にとって最大事の經典とは法華經のことであるので、山中における信行はこの法華經を讀誦することにあつた。六十一年の生涯において身延期の九年間が、最も安定した時期であり、大自然の中で心ゆくまで經典讀誦の如説修行が果せたのであつた。

例えば、

(A)「此身延の沢と申處は（乃至）猿のなく音天に響き、蟬のさあづり地にみたり。天竺の靈山此處に來れり、唐土の天台山親りこ、に見る。我が身は釈迦仏にあらず、天台大師にてはなけれども、まかるく昼夜に法華經をよみ、朝暮に摩訶止觀を談ずれば、靈山淨土にも相似たり、天台山にも異ならず。」

とみえるごとく、昼夜に法華經を讀誦し、また朝暮に「摩訶止觀」の講義を實踐していたことがわかる。つまり日頃の生活において、讀經と弟子や門下に対する解説が続けられていたことになる。法師品所説の五種法師を如説修行していたことになるのである。鎌倉に在住していたら到底考えられないことであつたろう。讀經三昧にひたることは身延という自然の中で、山林に身を交えることにより可能となつたといえる。讀經と日を同じくして門弟らに止觀を講説していたこともわかるが、入山の主たる目的の一つに、門下の教育と檀越の教化があつたことも事實である。法華經講義は特に三大部を中心として、常時實施されていたことは、その際テキストとして使用されたと考えられる『私集最要文注法華經』十卷が、それを物語っているといえよう。その他、讀誦と解説に関する例文をあげると、

(B)「法華讀誦音響<sup>二</sup>青天<sup>一</sup> 一乗談義<sup>二</sup>言聞<sup>一</sup>山中<sup>二</sup>」<sup>11)</sup>

(C)「今年一百よ人の人を山中にやしなひて、十二時の法華經をよましめ談義して候ぞ」<sup>12)</sup>

(D)「多くの日を送り、讀誦し奉る所の法華經の功德は虚空にも餘りぬべし」<sup>13)</sup>

とみられるごとくである。この中で(B)の文は(A)とは同様の文意であるが、(C)は百餘人の人々を集めての讀誦会と講説会が開かれていたことがわかる。

従つて、聖人がただ一人心ゆくまで讀經三昧にひたるといふ入山初期の状態からすると、讀誦の規模が移り變つて

身延期における日蓮聖人の如説修行（上田）

きていることがわかる。この(C)の文は弘安二年三月に曾谷氏が西谷の聖人へ、仏事供養を托してきたことに起因しているが、それにしても百餘人の人を集めて、十二時にわたって法会と講説が催されたことは、当時の西谷においては極めて画期的なことであつたと考えられる。いかに聖人を慕つて人々の出入りが、この頃に至ると盛んになっていたかを知ることができよう。交通も極めて困難な時代に、食糧難の折りから、山中に百人餘の人々を「やしなう」ことは、それだけでも容易なことではなかつたらうと考えられる<sup>64</sup>。

入山の当初は前述のごとく、付添いの人達もすべて帰えし、「但一人」になつての生活であり、初期の日常は全くの孤独であつた。草庵の近辺は、「人の住家一字もなし。適間<sup>7</sup>くる物としては梢を伝ふ猿<sup>8</sup>なれば、少も留<sup>9</sup>る事なく還るさ急ぐ恨みなる哉<sup>10</sup>」という環境で、「訪<sup>11</sup>人も希なる」状態であつた。特に冬季は、「雪深<sup>12</sup>して道塞がり、問<sup>13</sup>人もなき處<sup>14</sup>」となつて、世間からは隔離された地で、陸の孤島的な存在であつた。また入山の道中についても、

「宿々のいぶせき、嶺に昇れば日月をいただき、谷へ下れば穴へ入<sup>15</sup>かと覺ゆ。河の水は矢を射るが如く早し。大石ながれて人馬むかひ難<sup>16</sup>し」

という險難な道程であり、外部からは簡単に出入りすることができなかったのである。こうした「人馬むかひ難い」場所での孤独な生活が初期の三年間程は続いたが、次第に聖人を尋ねて来山する者が増加していったのである。道路の悪条件をのりこえて、不便な山中を訪問することは、決して安易なことではなかつたが、それにも増して聖人を慕う心情が篤いものとなつて、人々を身延山への旅にかりたてるに至つたのである。

直弟子や孫弟子を始めとして、主な檀越は次からつぎへと身延詣を企て、「人はなき時は四十人、ある時は六十人<sup>17</sup>」という状態にまでなり、次第に盛況を呈するまでに至つたのである。

#### 四、

こうして身延の中期といわれる弘安年間に入ると、門弟や檀越を交えての読誦会や講説会が、朝暮昼夜に開かれて、聖人の身延における日常生活は、初期の個人的読経三昧にひたるという状況から一変して、教化伝道の如来使としての生活に移行していくのであった。即ち鎌倉の「動」の生活から身延へ入山して「静」の生活へ、法華経行者としての国家諫暁の折伏の生活から、自身の宗教的静の世界に入って三昧にひたる生活に移行し、そこからまた再び教化者としての活動の世界へと、転換していったとみることができよう。

「この山のなかに木をうちきりて、かりそめに庵室をつくりて候しが、やうやく四年がほど、柱くち、かき壁をち候へども直す事なくて、」<sup>(19)</sup>

とみえるごとく、建治三年の冬には西谷の草庵が、いたみが激しくなり学生らを指揮して修復し、応急処置をほどこしている。

この頃はすでに『撰時抄』や『報恩抄』といった身延期の代表著作も完成したあとであり、教学上からも一代のしめくりがなされた時期を迎えている。この両抄に述べられた教学の結要については、すでに研究を終えているので、ここでは省略するが、日蓮教学の結要はこの頃の祖書を中心として述べられていると考えられる<sup>(20)</sup>。

入山の当初「しばらくは候はんずらむ。結句は一人になって日本國に流浪すべき身にて候<sup>(21)</sup>」という心境が不変のものであったとしたら、入山四年目を迎えて草庵も朽ちてきたのを機に、又別の地を目ざし下山して行ったかもしれないのである。

#### 身延期における日蓮聖人の如説修行

しかるに聖人は、この頃すでに身延の山から離れることは全く考えていなかったのである。建治二年七月の「報恩抄」の中で、道善房の遷化に際し、本来ならば何にをおいても下山して墓参すべきであるが、自身の意とするところを一貫してつらぬき通す上からも、下山するわけにはいかぬことを明らかにしている。即ち身延山を(A)の文が示すごとく、靈山淨土であるとし、法華經行者の住所であるが故に、釈迦・多宝・十方分身の諸仏を始め、守護の諸天善神來集の淨土であると信得されていたのである。

故にこの頃の聖人は、常に仏と俱に在る日常生活であり、純粹に宗教的な境界にあつて日夜仏菩薩に相いまみえ、感應道交の日々であつたと考えられる。身延山のことを、「仏菩薩の住給功徳聚之砌也」と述べている点からも首肯できよう。こうした心境は宗教者として、信仰上に得られるものといえるが、法華經をひたすら信じ、その説くところに従つて、実践してきた体験を通して得られるものであり、單なる理論上のみの淨土ではない。つまり法華經の色読から得られる境地ともいうべきもので、法師品の五種法師を実践することにより到達できる世界である。聖人は身をもつてこれを実践し、門下にその範を示されたということができよう。

#### 五、

さて、こうした五種法師を聖人自身は、身延山の生活で実践されたのであるが、書写に關して一見すると、聖人の一代における書写行は、法華經はもちろんであるが、他の諸經についても時に必要とする所を書写し、常に所持しておられたようである。經典のみではなく論釈についても、広く読破されて要文の書写がなされていたことは、祖書の大五部と称される遺文のみをひもといひても、数多くの論釈が引用されている点からみても理解できるところであ



る。これらの引用は手元に書写された自筆の写本、又は、抜書を所持していたことがわかるが、身延入山以前にあつては、忍難弘經の連続であり、時間的にも落付いて餘裕をもった書写行は不可能に近いものであつたろうと考えられる。

經典部にしても論釈部にしても、書写にはある程度時間的なゆとりが必要となる。身延期における聖人の書写については、具体的な記録は少ないが、折りにふれて書写されていたことは当然推察しうる。聖人自身はもとより、弟子や檀越らにも書写を命じて、法華經書写が実施されていたようである。一例をあげれば弘安四年十一月二十四日には、「戊亥の時、御所に集会して、三十餘人をもつて一日經書きまいらせ」とみえるがごとく大坊・小坊・馬舎の落成を記念しての法華經書写行が実施されている。

しかし聖人自身としては、遺文の述作に主力が注がれていたようである。法師品の五種法師中における書写は、もちろん「法華經の乃至一偈・一句」を指しているのであるが、聖人はその法華經の經意をわかりやすく書写し、檀越に理解せしめるべく解説し注釈を施して遺文という型をとっているのであるから、広義に解して「書写」であり、「解説」であることに相異はないものといえよう。

数多い遺文の中には、単なる消息文として法華經の注釈とは無関係のものも含まれているようであるが、聖人はあらゆる機会をとらえて、直接・間接法華經の法門について教化を続けられているので、一見無関係の遺文であつても、なんらかの型で法門との結び付きが考えられるのであり、經典書写に類する意味あいを持つものと解することができよう。本来、五種法師は自行と化他に及ぶ法師の修しなくてはならない行であることは言うまでもないが、主眼とするところは自行を通して化他にあるのであつて「如来使」たる法師が衆生を、仏に代つて教化するための五種行であ

### 身延期における日蓮聖人の如説修行

る。したがって化他のための書写であり、解説であるから、聖人の遺文はそのすべてがそれに該当するということができる。

かゝる意味あいからすると、身延期における聖人の遺文は、全生涯における遺文の三分の二に相当するのであつて、書写を含めた著書の量は圧倒的に身延期が多いことになるのである。単に数量的に多いというのではなく、聖人の数義・思想・人生観に関する記述で最も重要な部門をしめている遺文が数多くあるという点からも、身延期の遺文は不可欠のものといえる。聖人が直接に筆をとつて書写された遺文は、今日に至るまで嚴重に格護され、他に例を見ない程の点数に及んでいることは、大いに誇りとすべきである。

### 六、

次に在山九年間の信行生活について、遺文の上からその一端を窺うと、前述の如く法華經の読誦・談義・書写に昼夜をわたぬ日々であつたことがわかるが、そうしたあい間にも各地より登山して来た弟子や檀越の人々と、じつくり膝を交えての対談を始め、くつろぎの時もあつたようである。

行学日朝の『元祖化導記』によると、在山中の生活について、「或記云」として当時の伝承によると考えられるが、次のような行儀を紹介している。

「毎日所作早旦入持仏堂法華經一卷十日十卷読誦有之、幾度如此、一卷經後於日天御前方便品壽量品宝塔品勸持品涌出品神力品等要品誦之、此等事二時計也。日中法門談義有之、日夕同音方便壽量二品誦之玉、其外昼夜朝暮行学不可称計。云云。」

西谷の草庵時代はもちろん、弘安四年の秋に大坊・小坊・馬舎が完成してからも、仏前において朝夕の勤行が実施されていたことがわかる。一日一巻で十日で十巻ということからすると十巻本の法華經、即ち開結二經を含めて読誦されていたことになる。

さらに宝前での勤行のあと、日天に向つての読誦があり、朝の勤行は總体で「二時」にも及んだとするので、起床時間も早朝におこなわれていたことが推察できよう。これに加えて夕勤もまた方便・寿命の二品が読誦され、唱題行も当然実施されたであろうから、一日の中では相当の時間が、勤行についてやされていたと考えられる。こうした読誦のあいまをえて日中は法門の講義や書写、及び曼荼羅の図顕等に時を大切にしつつすごされたことになる。こうした定時の日課の他に「昼夜朝暮の行学」については称計できない程の自行化他にわたる行事があり、課外としての身辺周辺の諸雑事も、結構多岐にわたられたことが推察しうるのである。また『身延山史』によると、山中の日常生活について、

「各地より檀越の供養・並に質疑に対して其時々為人悉檀の益を得せしむる為に幾多の法義を説きて之を教益する等殆むど寧日無かりき」<sup>28)</sup>

とあり、更に前記日朝の『元祖化導記』の一節を引用している。記録に残された上からみても、相当の数に上る読誦・解説・書写（執筆）の量になるが、記録以外にも教化のための講説・著述書、又は個人的な信仰相談や処世のための訓誡等を加えると、文字通りに寧日なき年月であったことがわかるのである。

## 七、

このような日課は、もちろん健康な状態の時に可能であったのであるが、聖人は入山後次第に身体の不調を覚えるようになり、建治三年正月から半年の間、「連連此病無<sup>レ</sup>息<sup>（三）</sup>」という状態にあり、同年十二月から翌年にかけての「はらのけ<sup>（四）</sup>」も十月には「大事になりて候」という重態を経験されたが、そうした中にあつてもなおかつ日課をできる限り実行しつつ、四十人乃至六十人の人々との対応をされていたのであつた。氣力をもつて病を制し、信行に精進されたことがわかる。

しかし弘安四年に至ると、いよいよ病状も進行し春頃から秋過ぎ冬に至るまで、食欲も細り、「身のひゆる事石のごとし。胸のつめたき事氷のごとし<sup>（五）</sup>」という状態に至つた。健康状態は極めて憂慮すべきものとなり書信の返信を出すことも困難になつていった。さらに翌五年の正月には、「すでに説経のこえもたえ、観念の心もうすし<sup>（六）</sup>」という衰弱が増し、日課を進めるのも困難となつていったようである。

春を迎え、夏の猛暑に耐え、やがて秋を感じる頃、聖人はついに九年間住み馴れた身延山を下り、常陸の湯へ向うべく、病身をくりかげの馬に托して出発したのであつた。

最晩年の病疾にあわれた時期を除いて、身延の聖人は、表面上の状況は遁世のように見られる面もなきにしもあらずであつたが、実質上はあくまで仏使としての使命達成と、一代のしめくりを果すべく、五種法師の実践に専ら精進された日常であつたといえる。在山九年間の生活様式を見れば、単なる遁世の日常でも、世捨人の隠遁生活でもなかつたことがわかるのである。

さらに病疾の身でありながら、最後まで教化を怠らず、執筆に講説に日を送られたことは、まさに本化に徹した生活であり、五種法師の実践そのものであつたといえよう。聖人自身はこのような五種の如説修行を、通常の日課とさ

れていたと考えられるのであるが、檀越に向つては専ら「受持」の一行に他の修行が、すべて含まれるとし、唱題受持の一行を特に重視されているところである。末法の導師たる本化の立場と、その本化によつて導かれる檀越との立場の相違が、自とあることを知るべきであらう。法師品によれば、

「若善男子善女人 於法華經乃至一句 受持・誦誦・解說・書寫 種種供養經卷（乃至）當知此人是大菩薩 成就阿耨多羅三藐三菩提 哀愍衆生願生此間 広分別妙法華經」<sup>31</sup>

とあるごとく、法華經の一句であつても一念隨喜の者は、悟りを得て衆生を救うために此の世界に願つて生れ、法華經を広布する者であるとするのである。さらに右の文に續いて

「若善男子善女人 我滅度後能竊爲一人 說法華經乃至一句 當知是人則如來使」

とあることから、聖人自身まさしく「如來使」としての自覺に立ち、身延での日常生活はこの經文の色説であつたといふことができる。在山九年間は、「如來所遣」であり、「行如來事」であつたことになるといえる。

これらの經文に依つて行動することは、「依法不依人」の鉄則によるものであることは言を待つまでもないが、その「法」は、「我所説諸經 而於此經中 法華經最第一」<sup>32</sup>という眞實の經典が、自ら語っているところであり、宝塔品では多寶如來によつて証明されているところである。聖人は常にこの「最第一の經典」である眞實開顯の教法を所依として、すべての行動を律し、如來使としての生活に徹していたといふことができる。五種法師の各行も「行如來事」であり、晩年の九年間も「如來所遣」であつたことになる。

「此經開方便門」 示眞實相「是法華經藏 深固幽遠」<sup>33</sup>

此等の經文は聖人にとつて、その思想と行動の根底をなすものの一つとして、重視されたと考えられる。「報恩抄」

によると、

「法華經の法師品に釈迦如来金口の誠言をもて五十餘年の一切經の勝劣を定て云、(乃至)法華經に勝たる經ありといはん人は、設いかなる人なりとも謗法は冤れじと見えて候」

と見える如くである。法師品の「已今当」の文を引いて、法華經より勝れた經は存在しないことを論究している。

かくして身延での生活は、釈尊所説中最第一の經典を、受持・読誦し、解説・書写することの功德と、その甚深なる意義を説くと同時に、自ら実践して生涯のしめくくりを果されるに至ったのであった。

「命を期として法華經計をたのみ奉候」

という生活は、文字通りに命がけでの法華經受持であり、法華信仰に徹した日常であつたことを物語っているといえよう。

「よる(夜)ひ(火)をとばさねども、月のひかりにて聖教をよみまいらせ、われと御經をまき(巻)まいらせ候はねども、風をのづからふきかへ(吹返)しまいらせ候」

昼間の講説に続いて、夜間もこの祖書に見られる如く、聖教を読誦し、經卷を繙くという生活は、月の光と谷風を頼りに、大自然の中での日常で、聖者の心境はまさに靈山淨土における悟りの境界そのものであつたろう。同祖書の中に「人ぶ(夫)なくしてがくしやうども(學生共)をせめ」ともあるので、当時の西谷には聖人を囲んで何人かの學生僧が居住し、教化に浴していたことがわかる。当然ながら解説行や書写行が実修され、読誦行も盛んであつたことが推察される。

弘安四年十一月十五日の「上野尼御前御返事」によれば、題目の意義とその書写の功德について、漢土における烏

龍の例を引き、詳述しているが、法華經題目の口唱と書写が如何に大事であるかを説示したものである。<sup>27</sup>

このように晩年に至るまで、五種法師の各行を、自らも修し他にも勧奨されたことは、「如来使」として「如来の事を行ずる」という日常生活の現れであり、法師品の所説を実践され、「衣・座・室」の三軌を色説されたものであつて、「本化」の使命を果し続けたことになったといえよう。これは前述の如く「導師」としての自覚によるものであつて、聖人自身は五種を最晩年に至るまで、健康の許す限り実践されたが、檀越に向つては「唱題受持の一行」の中に、すべて五種が含まれることを明確にされている。

「法華經を受持て南無妙法蓮華經と唱る、即五種の修行を具足するなり」<sup>28</sup>

とあり、唱題受持一行の中にすべての行を集約し、この一行をもつて五種の修行をすべて兼ねることを明らかにしている。したがつて五種の各行を実践しなくとも、唱題の中に含まれるのであるから、唱題に勝る行はないことになる。

「一閻浮提一同に人ごとに有智無智をきはらず、一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱べし」<sup>29</sup>

とあつて、この一行以外に末法の衆生の成仏はありえないとしているのである。故に聖人は、前述の如く、自身は法師品の五種を、身延における日常の信仰生活で、忠実に色説しながらも、檀越に向つては、専ら唱題の一行の中に、この五種を含めて、これを修すべきことを勧奨されたのであつた。

要するに聖人は末法の導師として、「如来使」の立場から、自身の行について五種を実践し、その責任を果しつつ、門下に対しては最も実行し易い「唱題」に要約して、「具足の妙行」とし、「末代幼稚の頭に懸けさしめ」<sup>30</sup>られたことになる。聖人の身延在山九年の生活から、このことが判然としてくるのであり、聖人の崇高な如来使としての生き方が窺えるのである。

八、

最後にもう一つ考えられることは、こうした如来使としての信行生活、即ち如説修行の五種法師実践と同時に、人間としての日常生活の一面も、また当然ながらあったことになるのである。如来使としての自覚に立って、弟子や檀越を教化しつつ、読誦行や解説行を実践された純粹に宗教の「聖」の時間帯と、人間としての日常における「聖を離れた」時間帯が、一日の中にも必然的にあったことになると考えられるのである。

これは聖人に限らず、宗教者にとつては一般に共通したところであるとも考えられるが、聖人の場合を推察すると、西谷の草庵で「釈迦仏・法華經」の御宝前に在って、昼夜に読誦されるという「聖なる場所」と「聖なる時間」にあつては、「釈迦・多宝・十方分身の諸仏」もこの砌りに来集された「靈山淨土」そのものであり、信行を通した「悟りの世界」ということになる。

また仏に代つて法を説く場合も、その場はすべて「仏の国土」として顕現され、聖人の住所は即是道場として、靈山往詣されていたのであつた。「行如来事」の行者の住所は淨土であり、「聖」の場所と時間ということになる。まさに「靈山淨土に詣て三仏」と俱に在ることを意味するといえよう。

こうした「聖」の場と時間に対して、日常の一般的な生活の時間は、同一の場であつても、また別の場と時間として受けとめられていたと考えられる。聖人が同じ身延を「八寒地獄の業を身につぐのへり」といわれたのは、人としての日常生活における寒苦の状況を、そのまま素直に表現したものとみることができよう。弟子や檀越と一緒に、悦び楽しみ、又悲しみ涙を流して嘆き合つた人間味豊かな時間をすごされた場でもあつたわけである。即ち、宗教的



実践（如説修行）の時間帯と、それ以外の人間的な時間帯とがあったわけである。

一見すると同一の身延山を、八寒地獄の業とみる場合と、靈山浄土の砌りとみなす場合とで、矛盾したみかたのようであるが、一人の宗教者の純粹に宗教的な時間帯と、それ以外の時間帯におけるみかたの違いということになろう。この聖者としての面と、人間としての一面とが一体となつて、身延期の九年間があったといえる。この両面は二にして一であり、また同時に一にして二であった。例えば一枚の紙の両面をなしているとも考えられるのである。時に随つて聖者の面が表に現れ、人間としての一面が裏になり、また時には人間的な面が表となつて、聖者としての面が裏に、ということであつたろうと考えられるのである。この二面が各別に存在したというのではなく、不離でありながらも時に依つて表裏の關係として現れたのではないかと考えられるのである。

尚、人間的な一面として、西谷で孤独な清貧に甘じた生活については、「無始以来の罪障を消滅させ、三業の惡を転じて三徳を成ずるため」のものであつたとするみかたも考えられるのであるが、この点については既に論究を済ませているので、本論では省略することにするが、いづれにしても身延期における日蓮聖人晩年の生活は、一つには宗教者として「如来使」の立場をとられ、如来の事を行じつつ、また如説修行の本化菩薩行を實踐され、他方にあるはそれ以外の人間的な日常生活者としての一面を持ち、この両面一体となつての時間と場所を持つておられたということができよう。

そこにまた事の一念三千の法門によつて、靈山往詣も、娑婆即寂光も顕現し、通一仏土が可能となるのである。聖人の在山九年間はまさにそのための実践をされた日常であつたといえよう。

身延期における日蓮聖人の如説修行

【キーワード】

日蓮聖人・如説修行・身延山・靈山往詣

〔註〕

- (1) 報恩抄 定遺 一二三九頁
- (2) 拙論「日蓮聖人身延入山の研究」(『日蓮教団の諸問題』平楽寺書店刊) 参照。
- (3) 報恩抄 定遺 一二四〇頁
- (4) 四条金吾殿御返事 同 一八〇〇頁
- (5) DHAMMAPADA (『真理のこゝろ』岩波版 十九章二五七)
- (6) 報恩抄 定遺 一一九四頁
- (7) 立正安国論 同 二〇九頁
- (8) 神力品 大正蔵 九一五二
- (9) 松野殿女房御返事 定遺 一六五一頁
- (10) 真蹟は三島市妙法華寺に所蔵されている。行間に天台三大部を始め、諸経論釈が注記されている。恐らく講義の際のテキストとして使用されたものと考えられる。
- (11) 忘持経事 定遺 一一五一頁
- (12) 曾谷殿御返事 同 一六六四頁
- (13) 四条金吾殿御返事 同 一八〇一頁
- (14) 飢渴が常習化していた当時にあつては、地元の波木井氏や富士近辺の檀越からの御供養等の外に、参集者自身も食糧を持参して来たことが考えられる。
- (15) 松野殿御返事 定遺 一二六四頁
- (16) 秋元御書 定遺 一七四〇頁

- (17) 新池殿御消息 定遺 一六四四頁
- (18) 兵衛志殿御返事 同 一六〇六頁
- (19) 庵室修復書 同 一四一〇頁
- (20) 拙論「身延山における日蓮聖人の教学」(『仏教学論集』中村瑞隆博士古稀記念論集・春秋社刊)を参照。
- (21) 富木殿御書 定遺 八〇九頁
- (22) 報恩抄には下山できない理由を記している。(定遺二二四〇頁)
- (23) 四条金吾殿御返事 定遺 一八〇一頁
- (24) 地引御書 同 一八九四頁
- (25) 『元祖化導記』 下巻 四一
- (26) 『身延山史』 一三頁
- (27) 阿仏房御返事 定遺 一五〇八頁
- (28) 兵衛志殿御返事 同 一六〇六頁
- (29) 上野殿母尼御前御返事 同 一八九七頁
- (30) 春初御消息 同 一九〇八頁
- (31) 法師品 大正蔵 九一・一六五
- (32) 法師品 大正蔵 九一・一六五
- (33) 法師品 大正蔵 九一・一六六頁
- (34) 報恩抄 定遺 一一九六頁
- (35) 種種御振舞御書 同 九八六頁
- (36) 庵室修復書 同 一四一一頁
- (37) 上野殿御前御返事 同 一八九一頁

尚、「烏龍が子の遺龍が書ける法華経八巻の題目」については法蓮鈔(定遺九四八頁)等にも見られる。書写の功德を説示している。

身延期における日蓮聖人の如説修行(上田)

身延期における日蓮聖人の如説修行

- |      |                                 |    |       |
|------|---------------------------------|----|-------|
| (38) | 日女御前御返事                         | 定遺 | 一三七七頁 |
| (39) | 報恩抄                             | 同  | 一二四八頁 |
| (40) | 観心本尊抄                           | 同  | 七二〇頁  |
| (41) | 秋元御書                            | 同  | 一七四〇頁 |
| (42) | 身延山大学東洋文化研究所『所報』創刊号六四頁以降の拙論を参照。 |    |       |